

第5回ユマニテク教育フォーラムの報告と考察

鈴木達哉（ユマニテク教育研究所）

キーワード：地域貢献 高大接続 キャリア教育 アクティブラーニング

【はじめに】

ユマニテク短期大学では5年前の開学時から、地域への貢献を目的としてキャリア教育を中心に幼小中高の先生方とともに、互いの研鑽を深めるべく「キャリア教育フォーラム」を開催してきた。とりわけ、3年前に短期大学付属の「ユマニテク教育研究所」を設立させてからは、コロナ禍の中にあっても教育研究を途切れさせることのないように、工夫と細心の注意を払いながら実践を続けてきた。

われわれには教育フォーラムを続けていくにあたってのいくつかのこだわりがある。一つ目は参加者が顔を合わせて語り合うことである。昨今、コロナ禍にあつて、ICTの発展とも相まってオンラインでの研究会が増えている。もちろん、そのことによるメリットがたくさんあることも承知している。しかし、直接顔を合わせて意見をぶつけ合う熱量はオンラインでは不十分だと考える。そのため、換気、マスク着用、密を避けるために参加人数をしぼるなどの工夫をしながらフォーラムを続けてきた。二つ目は参加者が、ただ聞いているだけでなく、自身が意見を出し合うことである。これは自身の授業におけるアクティブラーニングへのこだわりにもつながる。三つ目は校種を超えての教員同士の対等な関係における交流である。そのため、このフォーラムにおいては昨年「三重県若手進路研究会」という県内の若手・中堅の高校の先生を中心とした団体と協働するようになった。本学の研究所だけが先頭に立つことなく、高大の教員が連携してお互いを高めあうというスタイルをとっている。

この報告では令和4年8月に行った「第5回ユマニテク教育フォーラム」についての実践を報告することとしたい。

【計画と準備】

4月に入って今年度の教育研究所のメンバーが決まるとともに、さっそく計画を練り始めた。当教育フォーラムは第1回からできるだけ現場の先生方が参加しやすいように、また参加者の自主性を重んじるとの観点から職務としてではなく、個人で参加してもらうために、この3年ほどは毎年、「山の日」に日程を設定し、今年も8月11日に実施することを決めた。次に、参加者に制限を設けるかどうかについての議論をした。この2年間はコロナ禍のため、密を避ける、県をまたいでの交流を避けるなどの配慮の上で実施してきた。今年はコ

コロナ禍が収まったわけではないが、日常生活や社会活動も行っていくという方向性は国からも出されている。しかし、やはりこのような配慮は行うべきだという判断のもと、①募集人数は会場定員の半数以下とする、②原則として参加者は三重県内に在住の人とする、とした。参加者を三重県内としたのは、当研究所の設立目的である「地域への貢献」とも合致する。現実には募集人数は会場定員（150名）に対して最大70名（最終的にはコロナ感染者増加の状況を鑑み最大60名）とした。

内容は、昨年と同様、当研究所を中心とした第1部と共催の三重県若手進路研究会が中心の第2部の2部構成とした。全体のテーマは当研究所の所員と三重県若手進路研究会の事務局で意見調整をした結果、今年の高校1年生から実施されている新学習指導要領に着目し、「生徒の主体性を引き出す」とことと「総合的な探究の時間をどのように教育活動につなげるか」の2点に決定した。この観点でプログラムを検討し、第1部は三重大学において生徒の主体的な学習、自己調整学習について研究を続けている中西良文教授をお招きしての基調講演と参加者のディスカッション、第2部では生徒に寄り添った探究活動を行っている認定NPO法人「カタリバ」から3人の講師をお招きしてのワークショップを行うこととした。当日のプログラムは次のとおりである。

プログラム

13:00 受付開始

【第1部】

13:30～13:35 研究所所長挨拶（鈴木建生 ユマニテク短期大学 学長）

13:35～14:35 基調講演 中西良文先生（三重大学教授）

「アクティブ『ラーニング』の質を高めるためには」

14:35～15:00 質疑応答、深める議論（司会進行；教育研究所副所長 鈴木達哉）

【第2部】

15:10～16:30 認定NPO法人「カタリバ」 実践発表と参加者ワークショップ

（司会進行：三重県若手進路研究会 多賀秀徳、市川歩美）

16:30 閉会 挨拶 鈴木 達哉 副所長

【当日の内容】

本プログラムの第1部はユマニテク短期大学の教職員研修（FD研修）もかねて実施した。当フォーラムの申込者は短期大学の教職員15名を含めて58名となったが、実際にはコロナ感染増加もあって、感染者、濃厚接触者、および大事をとって欠席をした方が7名おり、当日の参加者は51名であった。

第1部は三重大大学の中西良文教授の「アクティブ『ラーニング』の質を高めるためには」とのテーマでの基調講演であった。アクティブラーニングの質を高めるためには「学習の仕組み」を知って活用することが重要である、との基本的な考えから、学習者中心で考え、学習者の論理を大切にし、学習のプロセスに学習者自身が積極的にかかわる、自己調整学習を進めていくことが大切だ、と会場の先生方へ新たな学習指導要領の下での授業実践を提案していただいた。

自己調整学習についてももう少し説明を加えたい。自己調整学習の定義は「学習者が自分自身のメタ認知や動機づけ、そして行動の点から積極的にかかわっていること」であり、「自然に身についた学びではなく意図して積極的に自分自身の学びに関わること」である。その前提として動機づけが学習方略（学習のやり方）を介して学習成果を予測することが想定されている。そのため、動機づけを高めることと望ましい学習方略を用いることが重要になる。動機づけのためには「自らやりたい」とする自律性を大切にすることである。また、望ましい学習のやり方の前提としては「知識を結びつけた状態＝体制化知識」を身に着けることを目指したものであるべきであり、これによって①長期記憶中の情報がより活用される、②ワーキングメモリ（短期記憶）でたくさんの情報処理がなされる。体制化につながる望ましい学習の要件として特に主体的な知識の構築、ホンモノ（オーセンティック）な状況での学習、協同による学習、テクノロジーによる理解の支援、があげられる。自己調整学習は、計画→遂行・意志的制御→自己内省というサイクルで進んでいくと考えられている（ジマーマン2007）⁽¹⁾。このサイクルは熟達した学習者と未熟な学習者で異なっており、熟達した学習者が行っているサイクルで進めていけるのが理想的である。望ましい学習方略としては①認知方略：意味付けをしながら関連付けする、②メタ認知方略：モニタリング、プランニング、③リソース方略：人的/物理的（オーセンティックな学び）、④動機づけ方略：自身のやる気を高める、⑤協同方略：仲間との自発的な協同によって学んでいく、などがあげられる。教師にはこういった学ぶスキルそのものを育てていくことや自らが学ぶスキルを高めていけるようその重要性を伝え、サポートすることが求められる。

基調講演の後、参加者を4～5名ずつに分けてのグループディスカッション（深める議論）を行った。参加者には高校の教員だけでなく、教育委員会、本学の教職員、地元の企業の人、教育産業に携わる人など様々な立場の方がおり、それぞれの立場での考えを述べ合った。その後、質疑応答を行った。グループワークを経てのものであったからか、難しい内容も含まれていたにもかかわらず、高い理解に基づく質問が多かった。あとのアンケートにもあるが、実践の場においてどのように工夫していったらよいのか、具体的に尋ねるケースが多く、中西先生には丁寧に対応していただいた。

第2部では、三重県内の若手・中堅の教員が自主的に教育研究や勉強を行っている「三重県若手進路研究会」が主体となり、探究学習をテーマにワークショップを行った。講師とし

て認定 NPO 法人「カタリバ」から、全国高校生マイプロジェクト全国事務局の内海博介氏、鈴木胡美氏、長谷川大介氏の 3 人をお招きした。「探究学習における生徒との関わり方～学び・成長を促す伴走～」をテーマに「カタリバ」メンバーが実際に実践した福島県の「ふたば未来高校」の探究活動を事例にひきながら具体的にどのように生徒の支援、伴走を行ったのか、の発表を聞くとともに、様々な事例をあげながら会場の先生全員でディスカッション、ワークショップを行った。これから探究学習を行っていく現場の先生たちにとって、考えを深めるまたとない時間になったのではないかな。

生徒の学び・成長のためには教師は「指導する・転ばせない」といった従来の考え方から、「伴走者」として「支援する・失敗から学ぶ」とのスタンスの変化を求められていること、その役割も「寄り添う・引き出す、考えを促す、アドバイスする、コーディネートする、振り返りを促す」など大きな「チェンジ」が求められている。まさに新たな時代の教師の役割変化についての考え方は「目から鱗」であっただろう。また、生徒が探究を進めるにあたってそのフェーズを「導入期・成長期・成熟期」の 3 つに分け、各フェーズにおける生徒の状態に応じてどのようにかわるか、具体的な事例を示しながらアドバイスをいただいた。

第 1 部、第 2 部とも自分自身の勉強になっただけでなく、それぞれの学校に持ちかえって実践につなげることができる内容であったと思う。

【アンケートの結果と分析・考察】

フォーラム終了後、参加者にアンケートを取ることで参加者、主催者の振り返りを行った。

アンケートは第 1 部、第 2 部とも④大変参考になった、③やや参考になった、②あまり参考にならなかった、①参考にならなかった、の 4 つの選択肢から選んでもらい、さらに記述式でその理由を書く、という形式で行った。さらに、振り返りや情報交換のコーナーについての意見、この研修で得たことや今後への生かし方など感想、フォーラムへの要望・意見、についても記述式で解答をしてもらった。(なお、短大の教職員のアンケートは FD 研修として別のアンケートを取っているためこの中には入っていない)

【第 1 部＝中西先生の講演と参加者のディスカッション】

④ 大変参考になった (61%) ③やや参考になった (28%) ②あまり参考にならなかった (11%) ①参考にならなかった (0%)

主な理由 (記述式＝後の数字はその参加者の評価)

- ・ 様々なことを本校でも取り入れられると思った。特に動機づけは参考になった (4)
- ・ 新しい情報、知識が欲しかった (2)
- ・ 学習心理学の観点からアクティブラーニングについて理論的に話を聞けたため (3)

- ・未熟な学習者を熟達した学習者の姿に少しでも近づけられるように学びの仕組みを指導者が理解する必要があると理解できた (3)
- ・学び方を生徒に伝える機会を今まで活かし切れなかったということが分かった (4)
- ・主体的で深い学びのために大切なことが分かったので、次の機会には具体的な実践について話が聞きたい (3)
- ・学習の仕組みについて理論的に解説いただいて参考になった (4)
- ・理論が多く、実践例が少なかったため (2)
- ・未熟な学習者は方略を身に付ければ変化できるのだろうか (4)

【第2部＝カタリバの実践発表とワークショップ】

- ④ 大変参考になった (55%) ③やや参考になった (39%) ②あまり参考にならなかった (6%) ①参考にならなかった (0%)

主な理由 (記述式＝後の数字はその参加者の評価)

- ・ディスカッションがよかった (3)
- ・他の学校の先生と話ができて大変参考になった (3)
- ・こんな世界があったことに今まで気づいておらず悔しい (4)
- ・グループの中に教員ではなく経営者の方がいたので企業の視点で教えていただくことが多かった (3)
- ・探究学習にどのように取り組んでいけばよいか、大いに参考になった (4)
- ・想像しやすい例が多く、身近に感じられた (3)
- ・伴走者としての役割について改めて考えることができた (4)
- ・時間が短かった、もっと一つ一つ丁寧に聞きたかった (同じ趣旨多数) (2, 3, 4)
- ・有名なマイプロの話なので (4)
- ・高校の先生や教育委員会の方と話ができて視野を広げることができた (3)

【振り返りの時間・意見交換の時間について】

- ・時間が足りなかった (同趣旨多数)
- ・他校の先生と意見交換する中で思いや悩みを共有出来てよかった
- ・管理職や社会人の方とも話ができてとても参考になった
- ・先生の感覚は大変参考になる (社会人参加者)

【研修で得たこと、夏休み明けに実践したいこと】

- ・主体的な学びへのポイント、学びの整理

- ・学習者中心で考えること
- ・生徒一人ひとりを見つめ、向き合うことの大切さ
- ・見立てにまつわるチェックリストなど
- ・まず、自分の学びの仕組みを理解して生徒に伝えられるようにしたい
- ・学習者支援に重点を置いてゆきたい
- ・授業でのグループワークに応用できると思う

【要望・意見】

- ・リアル開催に感謝
- ・いつも講師が素晴らしくプラスになる
- ・グループワークを増やしてほしい
- ・ディスカッション、グループワークを増やす。前もって基調講演を動画で見ておくのもよいと思う

アンケートを分析・考察してみたい。

まず、講演・ワークショップ全体のイメージ・印象である。第1部・第2部ともほとんどがプラスにとらえられており、おおむね好評であったように思う。マイナスイメージのものも第1部においての実践例の少なさや、第2部においての「時間が足りない」といった、前向きさから出てくるものが多く、主催者としてはうれしい限りである。「自己調整学習」や「生徒の主体性」については、少なくともどの県内ではまだその理論が端緒についたばかりであり、今後、いかに現場の実践につなげていくかが課題だと考えている。まずは今回の理論編を通じて、自身が試行錯誤するところから始めてほしい。「探究学習」についても新学習要領が現高校1年生から始まったばかりで、すべてを教えてもらって成功から入るよりも、自分たちの学校に合った探究学習や「総合的な探究の時間」を考えるための材料としてもらってはどうか。

また、講演・ワークショップとも内容面での希望では圧倒的に多いのがディスカッションやグループワークを増やすことであった。ディスカッションやグループワークを通じて、様々な学校、様々な立場の方々と議論、情報交換することで得られるものは大きいと思われる。本フォーラムは教員ばかりでなく、地域貢献という意味合いからも様々な立場の方が参加している。企業人として外部連携に携わっている方、教育産業に努めている方、地域で児童生徒と接している方、保護者・PTAの立場の方など。また、学校現場で教育に携わっていてもほかの学校の管理職や教育委員会の人と語るというのは教員にとってはなかなかない機会であろう。

時間が足りない、という意見も非常に多かった。特に第2部においては講師が実際に高校生の探究活動に深くかかわっておられる方ばかりであり、成功体験ばかりでなく、「このよ

うな生徒に対してはこのようにかかわった（伴走した）、「生徒に考えさせるための方略」やその難しさや工夫など、現場で担当する先生方にとっては聞きたいことが山ほどあって、とても時間が足りない、というのは実感であったろう。この件に関しては、資料に「マイプロ」の全国での研修会（オンラインも含む）の案内を同封させてもらったので、そちらのほうに参加していただくことでさらなる研修を積んでいただければと考えている⁽²⁾。

研修で得たこと・夏休み明けから実践したいことの両面についても生徒・学習者を中心に授業を考えること、指導ではなく支援に重点を置くことなど、今後の教育に生徒の主体性を置く理解が圧倒的に多数であった。これは講演後の深める議論、質疑応答でも感じたことだが、参加者の理解が非常に深く、新しい教育をきちんと理解したうえで夏休み以後も各学校で実践をしてもらえるのではないかと期待が膨らんだ。

最後に、要望・意見において開催形式、講師についての言及があった。対面形式、リアル開催についてはこの2年間、ずっと悩んできた。たしかに、フォーラムによって知識を吸収するといったことだけならオンラインで十分だともいえる。実際、この2年間は全国的に見てもほとんどがオンライン開催になり、逆にオンライン実施によって場所や時間の制約がなくなり、気軽に参加できることで、研修・勉強・情報交換をする機会も増えた。そのメリットは計り知れない。一方で、リアル開催によるその場の持つ雰囲気、すばらしさ、参加者たちの交流によって発せられる熱量といったものが教育に与える影響も多大なものがあると思う。今後、ハイブリッドの持つ利点を取り入れることを考える必要はあるだろうが、我々はリアル開催そのものにはこだわりを持ち続けたい。

講師の選定に関してもこだわりがある。当研究所のメンバーは自身が様々な研修会、勉強会に参加して能力の向上を図っている。その中でメンバーが体験してよかったと思える講師を、その時々テーマに合わせてお願いしている。自分たちが勉強になったと思える体験を三重県の方々にもぜひ味わっていただき、自身の教育力向上につなげてほしいとの願いを当フォーラムに込めているつもりである。アンケートにも「リアル開催に感謝」「いつも講師が素晴らしい」とあったが、今回も生徒の主体性、探究学習への伴走、というテーマに沿った講師をお願いした。そのことを汲んでもらえたなら、主催者としてこれに勝る喜びはない。

【成果と今後に向けての課題】

最大の成果は今年もまた、対面形式のリアル開催ができたことであろう。コロナ禍に対する社会の理解が一定程度進んだこともあり、換気、マスク、密を避ける、などの制約はあったものの、参加者各人が自分の体調や周りの環境などを考慮し、参加の可否を判断しながら、主体性をもって勉強の場に立つことができたという意義は大きいと思う。上記のアンケート結果の項にも書いたが、コロナ禍に端を発するオンライン研修、オンラインフォーラムが

全国的に大幅に増えて、フォーラム、研究会が各地で多く開催されるようになった。そのような機会を通じて知識・情報をインプットすることも大切だと思う。と同時に、人と人とが直接交流することで、参加者同士の結びつきが深まったり、議論、質疑応答を通じてお互いを高め合ったりすることもそれ以上に大切にしたい。昨年、一昨年は対面での開催ではあったが、できる限り接触を避けるため、終了後は早々と切り上げて解散せざるを得なかった。今年は、マスク越し、距離に気を付けながらも、フォーラム終了後も参加者同士、あるいは参加者と講師が居残って対話、質疑応答、議論をする姿がたくさん見受けられ、久しぶりに見る熱い光景に「やっと戻ってきた」との思いを馳せることができた。

もう一つの成果は、新学習指導要領実施に当たって、その中心になる「生徒の主体性」「探究学習」に関する提案を10数校に対して行うことができたことであろう。文部科学省からは多くの新機軸が打ち出されているが、三重県においてはなかなかそれを実践に移したり、研究を重ねたりといったところが十分とは言えない。ずいぶん社会での受け取り方は変わってきたとはいえ、まだまだコロナ禍に留意しながら慎重に日々の教育を行う必要があり、一方でいじめ、不登校をはじめ山積する問題・課題に対処しなければならないなど先生方は大変な毎日である。新たな教育改革に対して研究したり取り組みを進めたりする余裕もないかもしれない。今回参加してくれた先生方が、このフォーラムを通して得たものをそれぞれの学校に帰って還元していただくことで、新時代の教育への一歩にできればまことに幸いである。

一方で、まだまだ今後に向けての課題も多いと考える。ここでは3つの点について指摘しておきたい。

第1には参加人数の問題である。もちろん、これまではコロナ禍の状況にあって、そもそも多くの人数を集めることができなかった。しかし、今後はこのような対面型のフォーラムもだんだんと実施できそうである。そうなったときには、「もっと多くの人数に集まってもらって、お互いの学びを深めるような機会としたい。」との思いがある。そのためには広報活動をさらに工夫する必要があるだろう。現在は、本学のホームページを通じて知らせるとともに、県教育委員会、県校長会を通じて先生方にお知らせしているが、どうしてもある一定の範囲に連絡がとどまっている。三重県若手進路研究会との協力も含めて仲間を増やす、そのつながりを深めることも考えていきたいと思う。

第2に現在は高校と大学が活動の中心になっているが、三重県全体の地域の教育レベルを上げるためには人数を単純に増やすだけでなく、その幅も保育、幼稚園、小学校、中学校も含めて広げていきたいと考えている。また、現任教員のみならずこれから教師を目指す学生、一緒に教育に携わってもらえる地域の方々など幅広い方々に参加してほしい。とりわけ、ユマニテク短大は保育・幼稚園教諭の養成機関であることを考えても、幼児教育についての現場の教育力をあげていくことはぜひとも必要なことだと思う。

第3に、地域の教育力を上げる工夫は当然のことながら県教育委員会や市町村の教育委員会でも様々な工夫が実施されているはずである。教員の養成機関である大学でも同様であろう。それならば、我々はそのような機関でなかなかできないようなニッチな箇所に対応する役割を果たしていくべきではないか。例えば、我々が交流のある現役の教員と大学生が交流することで若い学生が大学ではできにくい現場力を高める機会を作ることも考えられる。ぜひとも、次の段階として実践していきたいことである。さらに言えば、我々がすべての実践を受け持つ必要もない。全国には様々な素晴らしいフォーラムや研究会がある。我々スタッフはそのようなフォーラム等に自身が参加しているだけに、本当に地域の教員や学生たちの力を向上させる機会となるイベントを紹介すること、あるいは一緒に参加することで結びつきを深め、仲間づくりを行うことも可能であろう。

このように考えると、まだまだ我々には工夫の余地は大きい。ぜひとも今後も多くの方々と協力しながら、この地域の教育の力を上げることができるよう努力を重ねていきたい。

【謝辞】

第5回ユマニテク教育フォーラムを開催するにあたり、ご尽力いただきましたすべての皆様に心より感謝いたします。ご講演、ワークショップを実施いただいた三重大学 中西良文教授、認定NPO法人「カタリバ」の内海博介様、鈴木胡美様、長谷川大介様には打ち合わせからご発表に至るまで何度もやり取りさせていただき、参加者のみならず参加された先生方の学校にとっても有意義な勉強の機会になりました。共催いただいた三重県若手進路研究会の皆様には多くのアイデアをいただくとともに、スタッフとしてもご協力いただきました。ユマニテク短大の教職員の方々にも研修会としてご参加いただいたことはもちろん、会場設営、準備、HP制作等でお世話をおかけしました。毎年協力いただいている四日市南高校のPTAのOBの方々にも、今年も受付、写真撮影等お世話になりました。また、それ以外の多くの方々のご尽力のおかげでこのフォーラムが無事開催できましたことに心より感謝いたします。

【参考文献】

- (1) ジーマーマン, J, バリー (2007) 学習調整の自己成就サイクルを形成すること : 典型的指導モデルの分析 シャンク, H, デイル・ジーマーマン, J, バリー (編) 塚野州一 (監訳) 「自己調整学習の実践」 1-19. 北大路書房
- (2) 全国高校生マイプロジェクト全国事務局発行 「実践型探究学習マイプロジェクトサポート2022」を参照されたい。